重修真書太閤記 二編 五

和書門	
類	
號	一六二二一
函	二〇〇
架	八
冊	一一〇

内閣文庫		
和書		
類		
號	一六二二一	
冊	一一〇	
函	一七一	
架	一〇	

内閣文庫		
番號	和	16221
冊數	110	(15)
函號	171	39

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

重修真書太閤記二編巻之十三

秀吉謀て西方三人衆を招く事 并稲葉氏家安藤等帰伏の事

永禄六年の冬木下藤吉郎秀吉西美濃三人衆稲葉伊豫守安藤伊賀守氏家常陸介等を味方とせんと先北より種〻工夫を廻らし居るゝ竹中重治と三人衆と入魂なるふと聞探り知るを重治も此事を談じけるに重治いゝ甚だ此事得ぢる深義なるゞ故なるを所存なるゝ此北乃人情をゝし三人の輩ハ三人の所

内閣文庫

内閣文庫蔵書之印

存ずるべし只よく公の方へ行き練熟形しまふ智計を以て招くべし一人来らば二人もあらば同心もべし謀といふもの也ぐて偽あり偽を以て實城鉤を智と云ふ公乃智ふく招き玉まふ来らざといふことのべうば此事某ゞ中に及ぶ次と計畧ゆ方便一言城も幾せば木下さ次ゞの智者ゆまい忽ち其乃意城了り再び相談ゆ及ぶ次

齋藤道三乃妻い稲葉伊豫守貞通乃妹ゆまふ竹中重治の母ゆ伊賀守範俊乃女ゆ氏家常陸介卜と稲葉竹中と通家ゆるゞ故ゆ重治ゆ乃謀ゆ與もら さるゆ乃ゝ如くきしゆり

秀吉急度思案し右筆城呼出し竹中重治の手跡を似せて書簡城作らを三人乃使者ゆ一通ゞ持て三人衆乃許へ遣ゆしけるゆ竹中ゞ私乃使者のゆりゆて書簡ゆい重治州乃殿の城中ゆ移ゆ住せども織田家へ降参をしゆいゞ次國乃乱城さけく身を安く送らんゞ者ゆゆうさて當國乃容子城伺ふゆ齋藤家乃滅亡遠ゞ次大廈城傾く一木乃支ゆる所ゆいらゞとゆへバ方々ゆも我乃御心得いあるべくい何ゆも國中乃民ども城無益乃合戦ゆ苦しまはるゆうの御計いのるべうい然又此國を切取ん大将軍ゆ織田信長ゆるべし信長の軍立尋常ゆゞ次ひとい時ゞ聞しゆを事もいべゞ眼前見

もしれていまゝ一際の勇将こいたゞきれくひらそのさ洲
の股なる某が閑棲へ越なのまうし木下が軍配ふど御
覧もいつぐ某がゆゝとの偽なるぬとも知召へくるど細
やうゆゝ七ゝう三人衆の許おくい書簡をひらきゝて
重治がいゝ処その理明らうゝして別ゆ然めべゝ異見も
るゝく兼て齊藤家の仕置城疎居ゝうし所那まゝ若年
ゝう智者と云れゝ重治が勸むる所疑ふ屋さゆひら孤
ゝも一人ゆて決定をゝゝとゝもいうぐちかうおるゝくは
稲葉氏家が心中いうゆやとおりゆ処氏家稲葉ゝゝ伊賀
守と語合ゆうゝせゝと出來ゝう三人ひとゝゝく額を集め
て同じゝく竹中が書簡城出ゝ如何ゝゝべきと讀合それば

同じく文章ゆて手跡を正ゝく重治の自筆露も疑ふ屋
き所ゝゝ三人ひとゝゝく手紙拍ゝくまゝ上ゆ三人諸共
洲の股ゆいゝう竹中ゆ對面ゝて面上意趣を聞屋さゝ
うゝと使者ゆ返事城ゝゝをさゝしゆを打連洲乃股へも
いそぎゝる

永祿四年二月竹中遠江守重元六十四歳ゆゝく卒し重治
十八歳家督ゝて菩提寺の城主ゝゝう同じき五年
齊藤龍興を怨むゝことゝゝうて弟乃久作と共ゆ郎從
合せゝく十七人乃勢ゆて稲葉山城襲取齊藤飛弾守
を切殺ゝ龍興城追出ゝゝう織田殿此由聞ゝひ其
地然らせゝふゞ美濃半國を賜ゝうべゝと仰らまゝゝと

我生國を他國の人ゐ衆らせく所領多く得ん事と本意なくばとて衆らをそのぐち外祖父伊賀守範俊ら扱ひより城をば龍興に返し我身は江州へ立退しと云此ものどもの事正しく見る伊賀守ゐきは重治ら申し旨城信ぜしもの

木下は先達て使者の返辞城聞とる双し今やくと待所へ三人打連て入來り竹中ゐ對面せんことを謁木下ら初て謀りしとゐまを城門を開きて北城請ば三人衆不審なゐ少しも屈とる色なく城中へ入しば浅野長政出迎て本城ゐ案内ば三人衆いちとゐる故とゐなくばまでも知事の浅野ら行まつれく進く行き

木下自出迎ふく慇懃ゐ禮城ゐし某は當城を預る尾州侍の藤吉郎とゆゑものゐは三人衆の功名は兼ゝ聞及びくよ城ゐ慕ひしく存は所竹中重治の折くゆ出らゝ言葉に就て益ゝ武功の香ひしくいり城は見衆しまるとも心ゐ掛くるひしに重治ゝ音信ゆて今日當城ゐ入來あるべきよゝ承り及び何ら苦しくいべき此方へ入まいゝとゆて斯ゝ迎えまりしぬるとゆみより三人衆も心得ぞゐるゝ兎角いべきゐらゝきを先相當の答禮をゆゝ然ゆけるは竹中の書状ゐりて我ゝ三人打連て衆ていゐる計らず木下殿に見えまりしと所望の外の本望なきとも始より心ざして衆

り〜重治ゐ面會〜さく後猶又中入屋さくともいひやく竹中さは引合せ玉さうりくとやとて木下答へけるハ其ことゐは重治さも三人衆近ミ入來ひるべ〜とて些だうう用意さ〜はるとも思ひ〜ら今朝急ゐ清洲ようゆ〜ふゐらう〜とゐ赴くとて一通を残〜置さくは其上り〜引違ふさく入とのゐこともなく〜いとさく饗應やもと其さ呉ミ頼置さくはさうとて一封乃尺素を出して三人衆ゐうさ拡やぐさゐ北城拔さく見るに當城はぐさは越ひる上い木下と共さ清洲へ御越ひべ〜萬事を清洲ゐさくは意得ゆべ〜と書さう木下こゐ由城見て思慮深き重治乃計らひるまゐ實さ然るべき故と

其ほ〜爰ゐさく一二といふとも益ゐなことぞし木曽川の川獵〜ゐぐ〜いざ〜せるくは導引ゐ〜ゆさゐら〜ゐぐ〜先志ざ〜さく休息ひるべ〜とて兼さく用意さし所ゐれば善城盡〜美を謁〜て饗應ゐ〜ひ〜ゆ〜三人衆も思ひ乃外のことゐぐ〜まゐ饗應の座さ付ひるゐ木下いよ〜心を用ひ懇さ取ゐ〜ゆ〜けまゐ敵味方乃ゐぐちゆもゐく〜さぐおゆくと酒のさ飯喰木下ゐ主振ふぞ成〜ようゆう然饗膳を徹さて〜ゐ秀吉立出さ〜ゐ先導ゐ〜ゆべ〜とゆゐ三人衆も重治と應對〜てのち秀吉ゐ見參〜ゆ振ゐうて中入ゐとゆひ〜かゆさくの荒増ゐまゐ清洲ゐ行さ竹

中ゐ面會し〳〵今朝よりの始中終を語り尾張と合躰ゐ
をゐ〳〵と三人ひと〳〵く決定せ〳〵とゐまゐ木下ゐ打連
く洲の股川をゝゝり清洲ゐ趣きける此時木下使者城清
洲へさしらせと出始末を告ゝりしほどゐ清洲ゐくも
其の用意をなしく待居ゝり三人衆い木曾川を打ゝり
尾張の國ゐ入行ば程なく清洲ゝつきゝりしが正しく織
田殿と弓矢城取〳〵といふまゐども美濃と尾張ハ久し
き敵國なる上我等三人い敵ゐ取くも由〻敷ものをし
其まゐ城何の用心も為ずく居城の内まぐく入込せし織田
殿の心ひろさよと心の底ゐ甘心しながら流石敵國の
城中なまゐ聊猶豫しける所へ木下ゝ案内ゐよりて城中

ゝり使出來り重治通まゐくとゐりて三人衆をよび
參らせるゐ〳〵待付なゐ及ぶぞ爰まぐく羅越ていも
洲の股ゝり重治を尋ねく來る人ゐ〳〵ば竹中が休息所
はく案内申せとのことゐくいと云ゐより木下三人衆を
伴ふて本丸ゐ登り重治が休息所といふゐる其の体
いろゐも奇麗みして織田殿の書院の内とゐ〳〵れゝ
彼是見廻し〳〵座ゐ着ばゐどゐく若殿原出ゝりて茶を
點し點心城勸む三人共ゐ茶城呼し終るゐ竹中木下
近習諸士城尋ねゐ〳〵竹中主ゐ〳〵く三人衆參向
ゐ〳〵城告ゐ速ゐ面會ゐる樣申次給ひとゐりし
かば中次〳〵ゝゝり奥ゐ入頃く立出中樣重治ぬし

三人衆乃ハ越わ[illegible]しくと待つびるひしが定めて路次ゆて猶豫なくまゆらん行逢所はぐく行く見たやうて只今乃ゆを立出るひしなりなぐく帰りるふ屋一暫時休息なるしくと云て引入る木下あれを聞さてく彼是と間違はるとの氣乃毒はくふと獨語所へ中次立出木下殿殿乃召せるふゆ疾ハ参りのまとと勧むる故木下三人衆と理城のぐく奥へ参上坂引違て林佐渡守佐久間右衛門尉柴田權六郎坂井池田森不破梁田乃面〻一同ゆ出來う三人ゆ向ひ禮をあしておのく名伐謁り竹中重治より三人衆のと委碎ゆやはなるしくゆ信長ゆも日比の所望叶ひしとて大ゆ悦喜思ひ

只今見参入ゆべし我等ゆ信長乃旗本乃足輕伐預るも乃ゆはなれよりのちハ見知せるふく方中合とうひゆゆば薄参べしといへば三人乃輩ふくゆ驚懼し織田殿の旗下ゆ属をムくとゆ拓ての本意あるゆ重治と面會し手續を定めくのち免も角も覺悟せしとゆを居くるゆ鴉の背と喫違ひしゆ胸うち騒ぐてのく所へ中次もくと立出此方へとゆ扶乃跡ゆ従く進むゆどり織田殿例ようも厳くしく装束して禮式正しく對面ゆり三人衆一同ゆ着座なるゆ織田殿宣ふ様美濃國ゆく土岐齊藤伐除く御邊等の右ゆ出る

その聞も及ぶ弦弓矢乃名譽も代々に日記ゐ傳ふれ
ぞいはぜゝ對面して語り合をへさと願ひしゐ此程
はるゝ重治乃噂ゐく此邊はぐく入來らるべき由を
知てかくゝ計らひしゝ抑齊藤龍興乃政事みだ
き國人等ゐ疎まれ民百姓困窮をること城哀をむが
故ゐ人れを援たるゐ馬伏出して度々堺目ゑ
く合戰しけるゐ大澤次郎左衛門尉竹中半兵衛尉
ゐど先達て當方ゐ隨從せり捨乃らゝ竹中周旋ゐ
て御邊等今まゝ某と一城ゐ集會あらしゝふを
ゆゝ後濃州靜謐乃計策をゝしのへと懇ゐやされ
しゐよう三人衆いゐべき辞もなく仰畏入ゐ竹中

大澤と評議仕りそ乃時節を見合セ御出馬伏請ヤ
濃州平均乃謀ゆめ〳〵ゝしゝべき旨伏答ヤけまゝ信
長大ゐ悦びるゐ種々乃引出物引き饗應ゆりけゐ
ゐ捨降參乃名もきゝつえ伏して美濃尾張自然ゆ合
体ゐなりけるゝと偏ゐ木下ゞ智計といひ川尾〳〵
織田家譜ゐ永祿七年美濃國士氏家常陸介ト全
稲葉伊豫守伊賀伊賀守號西方三人衆叛齊藤龍
興應信長とゆゝ此後乃ゝとゆゝべ〳〵
三人衆もそゞ伏ゝ安堵乃おりひをゐ〳〵秀吉と
同道〳〵て洲の股ゐ帰りゆる道をゆゝ竹中伏尋祝
はゝまゞも終ゐ逢ゝと乃く洲の股ゝ帰ゐ着木下竹中

み對面し西方衆味方み屬しく爰み来りし城同道みく清洲み參向し織田殿乃見參ふ入さ考ぐ今はゝり帰り来まうの方便其ら方寸より出し形ども實は邊乃右筆をかりうりと有のまにぞ語りける竹中はれを聞く聞て以く敵をそろふと軍者乃常形り我何ぞあれを恨むべき彼人〻来らば面會して御邊乃術を助べし心安く思ひまくと云しかぞみ氏家稲葉伊賀守うちのまく竹中ゞ閑室み入く對面し三人等しくや様御邊乃書翰ふて我等城招ゞのセまふ懇といひ其の理まく明白ふれば當城へ參向をし所御邊留守みそうゞ城木下殿

ふ面會し夫より又御邊乃導引みまうを清洲へ罷向ひ引違ひふゞうれのくばうり織田殿乃家老衆りく對面せしのゝ形らに殿みを見參し數多乃引出物賜りうり終み濃州平均の約束まで為して只今罷帰る處ふくれおろと御邊と打合とて返答ふしまうんと存ぜしふ行違ひしうを面〻乃私みく計らひしと返さくを遺恨りくいとい弘聞く重治打笑ひ我當城へ移うしと全く濃州乃民を安樂みふさん為乃本意形まばはだうれ詞乃行違ひ何り苦しりる屋ひとく更りく他乃ことに及ばばらりて三人衆を木下の謀とは心付ぬまとに竹

中ゐ誘ひしとおりし面々在所へ帰りけれ
流布本此一段大ゐ相違なり予洲の股の舊姓某
の筆記ゐ従ひて改刪せ

木下小市郎初陣高名の事

并信長小市郎へ一字を賜る事

木下ゑ計畧ゐて西方三人衆を尾州ゐ合体なさせ
けるのちも美濃の侍中大ゑ織田家ゐ志ゑ寄て
けり扨又その年も暮て永禄七年とありけるゑ今ハ早
國人大ゑ尾州ゑ帰伏ゐして齊藤家の羽翼とたの
むものも勢衰へ稲葉山一城のみあるのみ
時到まりとて三月上旬出陣を催されける由ゑ聞て

木下同ゑくい秋まぎはゑ左もいさぎ齊藤家
中ゑあれくとありて内變起るへくいその變ゐし
きゑひ機ゐ應し急ゑ攻ゐゑ暫時ゐ平治仕るべく
いとゆ事ども織田殿聞入ゑまゑ扨是まて降衆
内附乃ものゑくてさゑ馬ゑ出して合戦を挑ゑゑ
ゑ今ゑなまゑの案内者なり扨の上ゐ洲の股ゑ要
害なりゑ足ゑゑ然らば何乃見合ゑゑとゑ
有べゑ只速ゑゐ出勢し一時ゐ攻破るべしゑゑ八
千餘騎ゑ卒してまゑ洲の股乃城へ入せるゐ木下
迎へゑり折角御出馬ゆへども城責乃ゑとゑ今六七十
日不ど御待なるべうゆとゆ織田殿何乃恐怖ゑる

所なりて左様ゐ猶豫もくきやたゞ一舉ゐ責破るべ
し但別の子細なりや詳ゐやべしとありけるにより
木下ヤ様別の子細も聞もゐ今程齊藤方れ諸
士一致して君乃出馬せしう備を設く此故こ其の
軍いりも勝利を得ぞ況や城を名こ負稲葉山聞へ
る名城ゐ兵粮玉藥十分たくさくはるゆりく
御心乃まゝにありやさばもし籠城年を越る時い
隣國乃變も心元なくゐ然るにより今六七十日を過
しいまゞ不意ゐ出さく即功せ得る時いまゝ
されども後の軍乃為ゐ是もまゞ乃ばいとく神
速ゐ一戦なしうふく神速ゐ帰陣ましはなべし

その〻ち謀なりとヤきゝ織田殿後乃謀とは何事こ
やと宣ふ木下ヤ様両方三人衆を用ふべき時刻到来
せり抑とも乃三人衆い齊藤家一族乃好りくば更ゐ疑
ふ所なし依く彼等ゐ謀計せ行ゆせそ乃不意ゐ
出く責くらんゐを籠城乃便宜を失ひ落城眼前
ゐなるべきなりとそ乃籌策せ演しなどゐ織田殿
も漸得心ましく然ば一戦をもくゆよく催ふもて
だしとて軍勢の手分せ定めらるゝ久しく在
國して案内者こまば一番木下藤吉郎一千餘人二
番ば吉例ゐまうも柴田權六郎森三左衛門二千餘
人三番池田勝三郎佐〻内藏助前田孫四郎二千餘

人その次ゐ大将軍織田殿旗本三千餘人後陣をそこし引
下りく佐久間右衛門尉一千餘人ゐて備えられたりゆ
も旗本空虚こなりう敵俄ゐ本陣ゐ逼る我防ぐれんが為ゑ
此五手組乃備竹中う指南せ〜処とつ〜う實ゐや織田
殿乃備いりも四段ゐて五段ゐくも車うとつくも
乃〜如く進放待の法なりう〜佐久間の備を引分くる
甲州家ゐて先まうと號け〜陣法こ似うう
前後の軍勢九千餘人今迄かゐとの人數を出されしとゐ
祝ゐ齋藤方乃諸士此度ゐ大事の軍なるべ〜敵我侮りゆ
まちそゐ要害ゐよりく敵をまち輕しきとゐそと軍評定
一決〜先丸毛兵庫頭長井隼人三千餘騎ゐく先陣を承うり

牧村牛之助長井飛弾守二千餘人ゐくそ乃跡ゐはべき日
根野兄弟二千餘人ゐいりもの如く伏兵とをり扨旗本乃
諸士をと〜不足なりまれゐ西方三人衆を催促して加
勢とゐまたべ〜と云処へ稲葉氏家伊賀守面〻乃人數を引
卒して出来れり齋藤方ゐそい西方衆乃加勢ゐ我ゐ勝軍ゐ
瑞相なれ今度い信長我打取くく多年の遺恨を晴をべ
きなりと勇くゐ勇む処へ伊賀守進く出てゆけるハ我
くい二手ゐ分まく合戦ゐそ〜に酣をなりく時横鑓
我入く突崩ゐそ〜とをり齋藤方乃諸士ゐ義尤邪
ゐと同じけまば氏家安藤を左乃うゐ備を立稲葉
を右の方ゐ扣へうり是を元より織田殿と示し合せ

軍法なる物知らで頼〻〻美濃勢の運の程去ぬるなれ
けを爰ぬ尾州の先陣木下藤吉郎逞兵勝つく一千餘騎
静こと和〻よりも敵合近くなりしかば鉄炮をうちかけ
真先ぬ長柄乃鑓のちくる兵士三百餘人烟の中より穂
先ぬそろくく突うをいそのの次こ馬強乃武者五百餘騎
潮乃湧如く駈出うり拵乃間ぬ歩立乃侍二百餘人鑓をひ
ねりて突立〻〻進うをこ丸毛長井ゞ三千餘騎散〻ぬ突
くゞされ思ぬ拵ぬほと引退ぞこ馬より飛下り鑓を取
く突合ムとする所へ木下ゞ馬武者面もふくゞ駈うられ
お丸毛長井ゞ兵士無二無三ぬ駈ぬやまされ右往左往り
散乱を兵庫頭隼人踏止りてもくをとなせれども耳

ぬも聞入ゞ敗をして落行勢の中より小牧藤蔵と名乗
て只一人ふくとゞり大太刀ぬ打ふり木下勢こ切て
る勝ぬうり当る木下ゞ勢小牧一人ぬ駈立らを或を討
を或を疵ぬ蒙うられぬ敵をるのをく見えられば
蜂須賀又十郎青山小助我討取く高名ぬせムとむふ
所ぬ秀吉の弟小市郎今日初陣乃手柄ぬ能敵ぬ討ム
とをふ懸居うしゞ斯と見るよりをこ寄鑓ぬ
捻りて突ぬる藤蔵を血ぬ染うる大太刀ぬく渡り
合ける拵見く浅野彌兵衛かけ来り聲をうけて小市
郎ぬ援く藤蔵をはる勇士ををこ今朝より度〻
ぬ合戦ぬ疲をはをゞ終ぬ小市郎ぬ突ふをられう

されども大勇の小牧ゝ鑓の塩首を手操り引きを
ゝとまる処をすぐさまに任せ鑓を放てば小牧尻居
に倒るゝを太刀を抜き躍り掛り藤蔵が首を打落さ
木下小市郎今年廿五歳天瑞寺大夫人の所生にして
太閤同腹の弟乃ち大和和泉紀伊三國の主として大
和大納言とゝ是なり
小牧討死しのち長井が兵ゝ合さるものゝ多くして
二陣の牧村長井飛弾守入替る尾州方こゝも柴田權六
木下に向ひ進み牧村長井ゝ進み
ゝや鬼柴田が急に駈立ゝとされば彼
こゝ權六郎に寄合ゝ過ぎると勿ゝ向へ

戦ふ者ゝ惣軍乱れ所へ三人衆の勢柴田乃横を
目にかけ突かゝる柴田横鑓を防ぐと一所に備を立
て待向ひ乃間に牧村長井が勢ハ三人衆に隔くらま
柴田に逢と得ぞ乃時木下織田殿に申旨ゝ
しゝば織田殿神速に軍を帰しゝが故に柴田ハ三人
衆に送られゝ静ゝと後殿して洲乃股の城に引返す
三人衆もゝを追ひ柴田を追て長逐ハ然るべゝ
や是もゝ引返しゝ織田を討漏しゝけるとは
残念さよと誠しゝやうに詞を腹心の味方乃所為と思ひ
もゝ齊藤方乃運の末とて愚なる織田殿を洲股に
入ゝひ諸軍勢を休息させ木下が今度乃働を抜群な

わと稱美せしめ給ふ次ぎ小市郎初陣の手柄ぎ敵方の勇士を討取しと比類なき勲功とて名乗の字を賜ふ秀長と名のるを木下が一方の將と称されるる流布本名乗の字といひうり長の字上下の論なきども後人臆度乃説なれどもこれを削る

重修眞書太閤記二編巻之十三 終

重修眞書太閤記二編巻之十四

秀吉三人衆ぎ神策を示す事

并織田殿洲乃股え出馬の事

應仁乃しのぎ永禄の今ぎ至まぐ既ぎ百年ぎ垂ぎ此間一天四海ぎ干戈競ひ起り諸國とりぎ合戦止時なく興廢存亡互ぎ入り替り乃間悪人強盛ぎ威を恣ぎこれども善人微弱ぎして是を制することなく然道ども日月いたぐ地ぎ墜ぎ天人の道全く亡びぬるし道ぎ守りて信を失さざるものい衰ふるといふる必後榮を開き非義ぎして威ぎ募ぎものい盛ぎれども禍

遂ゐその身ゐ及ぶ天の明鑒まことに恐るべし濃州の國主齋藤右兵衛大夫龍興と無道ありといへども若年那きびそのの罪強く責るゐ足ば牧の祖父道三入道奸計不義ばかりにて一國を押領ととへども天その罪をのるさばその子義龍の為ゐ破らまと其臣小牧源太ま斬る義龍父ば弑せし罪天誅のうるがさゐ〳〵ぬどもふしぎこ首領を全くして定業の夭死ば得ざう然るゐ道三の不義や義龍の悪逆と一途ゐ報ひ来りて龍興ば叛く者多をゝ齋藤家滅亡ばるさ時期至れりといへべし

道三入道十七歳ゐして美濃國池田郡白樫の長井藤左衛門長弘ゐ仕ふといへり或ハ齋藤妙椿ゐはゝ

云但妙椿ハ明應九年十一月十三日卒ば道三七歳の時也又明應五年十二月七日江州合戦の時齋藤新四郎利國妙椿の長子也同新四郎利親戦死セしのち利親の嫡子勝千代幼稚なるゝ故こ白樫の長井藤左衛門長弘稲葉山ゐ住ゐくされば助くといへり道三いまゞ十七歳の時と云永正七年のことなり享禄三年道三三十七歳藤左衛門夫婦ば弑し稲葉山の城を奪ふ長井一族是ば討ん〻ことを謀ゐどども土岐頼藝をとゝび近江の佐〻木定頼道三ば援けて剰長井の後として長井新九郎と改めしむ其のち土岐頼藝の妾ば妻として義龍ば生ちむ但義龍實ハ頼藝の子なり義龍三十八歳ふく

卒そとりくだ大永四年に生れしとぞ其の子の龍興今永禄七年廿三四と知るし

然れども龍興ぞ日夜酒に耽けり民百姓の苦患を思ふ我身の榮曜をのみ思ひ諸士を撫育ぞ

つかれ果しを諫むるものくみるぞその倒るを待

て無墓なれ西方三人衆は去年織田殿へ見参をしぞ

表は齋藤家合体の色を顯すとも内心は専尾州に

味方謀をめぐらしいるもして忠を織田殿に

企けるぞ洲股の木下と牒し合せ寂寄の侍を招

きけるぞ今は一國の武士大概木下と音信を通じ好

を結び懇に語合やうにるしぞ今は叔と木下謀を案

出し三人衆ふかくくるくと示し合せしぞ三人衆

その意をえく齋藤家の諸士と集會をし評定しける

洲の股に敵城を築このもしぞ以来尾州勢洲の股を足

溜とるして國中に勢を出し戦を挑ぞ間は一村一

郷の諸士を語合ふ故に旗下の諸侍もとうせぞは木下と

計らるべうおぞ然きどくくしく是を防ぐ用意を

せばは叶ふぐうぞと云ば日根野長井牧村丸毛左の義邪

きども防禦の用意別の思案もいくば三人衆の異見を

承くばやと云ぞ時稲葉伊豫守ゆ稲葉山より

ける所の兵士を出して山下より町口の間に住居させる

ぞ近在近郷を尾州勢の放火する時神速に駈むるく

蹴散さんに便よかるべし其の外乃侍衆も城中に籠り
みな敵のあらん方へむかはせんよりも面々其領地々々
に在住させおきて尾州勢乃川を渉るやいなや乍に待
迎へて討散しいさゝかも足を蹈させずその織田信長い
らはおつのに共進むことを叶はずして其の閑に洲の股乃城を
窃に焚打させば尾州勢いかに猛くとも當國に向て馬を
いるゝこと能はじ夫より彌軍士を調練して時を伺
ひ尾州を責従へたまはんこそ孫呉が秘とせし所漢家屯田の良
策といふべしと勧めければ丸毛日根野いかさま當城
乃如き要害堅固の城中に多くの兵士徒に住居せんこと
かゝる乱世なれば可然手便ともなりのちもまだ山下の所々

に在住し近郷近村に出張して敵乃乱妨を防がんこと尤可然
覚ゆと衆議一統せしかば大将龍興もなほさらに悦喜び是急なり
尾州勢を挫べき計なり早々其の用意をなすべしとありし
かば城中の若殿原半に過て城を出山下町口在々所々に
分散し組々を分てあれをまもらせ又山下の麓に陣営
を構日根野兄弟を差置諸方一緒に相圖を定め何時も
いたば互に相救ふべき約束を厳重になしければ今迄
城中三万余人乃兵士なるがうちに六千余人となりその外足弱
老人幼稚のものを加へて一万余人と着到せしその時三人
衆まゝ謀らく山下乃町人等も富有の者多し急變あり
臨で財宝を失はせんこと尤憐べし急しく入城せしめば

彼者共いろ〳〵さ思ひ城をあけしと勸めけるをどもの内も一
議に及ばず可然とそうして悉く惣構の内へ呼入れかゞ却て
城中の人數八三万五六千に及べり逆兵勇士城散在せしも無益の
匹夫匹婦と入替結句兵粮をちやく弊盡さしめんと謀りし城
知ざりける齋藤方の諸士の心の内こそ哀なれ丸毛長井日根
野らんどゝく世に聞えさる名人勇士も三人衆にさそなれて
惣構の内なりける兵粮藏と本城とはその間よりほど隔てる間を
を運送のとて城町人共に打任せさく勤さゼ矢玉藥その外の兵
具を所〳〵の持口へ引分遣しあの内ら城中ふいふふく那
つゝの者ども斯てぞ防禦の便調ひしと悅び勇ぞ愚なれ三
人衆をかやうに齋藤方を謀りをゝしさて洲股へ住進を

かば木下もまこしらみ物聞城出して是城さゝせけるに三人
衆の中狀と少しも相違なりしかば藤吉郎ひそうに清洲に
飛上り織田殿の御前に出く此年月の心を苦しゝなりける
美濃國乃躰ゝく有りし上ハさやく御馬城出されて速に征伐
あらく彼國平均なさしめられ然るべしと言上ゝる事を織
田殿大に悅ばせられ敵の容子いかやうに成けるふやと尋
ねるに稲葉山の手配り備立の樣を言上し三人衆
乃内通のおもむき落もちく中出し叔御出馬の樣を先
に人數千二百ばかりひそうに洲股へ入させるべし某
その乃共を所〳〵に埋伏さゼ置君に某が言上し生
日限違へなば御旗本ゝうに夾に出馬なるべし城責

なかうくと言上しこれ小筌城以て大魚を得る計策路うとやけまべ織田殿席城打て勇このひ鬼神不測の妙術と云ゑ〻奇代の智謀比類なしと大ひに感ありえや〻此謀城行ふべしと命ぜられしかども木下家早片時も猶豫ならざる時なり殿但御人數を夜の中みくり出しつゝ様に沙汰をうべし君の出馬を二三日城過べうゝ彼國乃御手ゐ属せんと十日城出まゝくれとやく木下洲股へかくしうべ織田殿増く喜びのひそ乃夜より手組ゐて五百七百一千不ど〻〻城分ちく森池田坂井佐〻前田を大将として忍やうゐ洲股へくり入ら邑うべ木下その手くの大将くちゐ謀城示しなわせ案内者と付て洲股近郷ゐ埋伏させゝり両夜の内ゐ八千餘乃人數と其所彼所ゝ忍ばせ乃り扨のち三人衆乃許へ浅野蜂須賀両人城使者として再應の計議を談しその〻ち木下の勢の内より物馴ゝる兵士五百餘人を撰ゝび梶田隼人稲田大炊日く野六大夫を物頭としく忍びく〻小三人衆のもと〻遣しゝる三人衆ハ彼五百餘人へ面〻の勢と加え稲葉山へ使を立くや様洲股へ夜討仕るべく存い但勢少く不足ゐれ天晴ハ加勢ゐうべしと許へしく不どゐ龍興何の思慮ゐも及ばゝ城中より七千餘人城三人衆の許へ加勢ゐ〻そ〻出さるゝ三人衆ハ此由と聞て謀成就ちゝと悦びその始末を木下へ申達をしゝバ

秀吉かゞりをよく悦び直ち清洲へ使者を遣はし七明日
手合と決定仕り間今夜中に御出馬然るべしと住進せ
しかば信長叔父そと勇立つる柴田林丹羽佐久間の
老臣等と共に五百餘騎卒して夜ひそかに洲股
へ赴きける木下秀吉迎ひ三人衆乃手筈具に
言上しけるは稲葉山の落城明日を過べからざを宣ひ
そ乃夜を例よりはよく諸士に物賜はりてはくけり

三人衆かりに洲股城を責る事
并織田勢稲葉山を取圍む事

信長洲股へ着陣まもなくれば木下手勢五百餘人に
引分て大将乃御勢に加はり都合一千餘人にて密に洲

乃股に出間道より瑞龍寺の藪に至りて埋伏し
瑞龍寺は稲葉山の麓にあり齋藤越前守利藤入道大年
妙椿大居士應仁元年八月天台宗の舊跡に轉じて
あれを立て岐成頼乃菩提寺とし悟溪和尚を開
山とせり
洲股に竹中半兵衛重治をのゝ置けるに重治今まで
美濃攻のことに於て一言に及ばれども木下が神策に
感嘆し木下のもとに三百餘人の兵を城中所々に
引分て大勢籠りし体をもつて防禦の備をなす
くを見せけるはくもの三人衆は加勢に来りし日
根野兄弟が陣に入り今夜急に洲股に攻入べきとして

語らゐしらば日根野兄弟この謀實ゑ然ゑ八存ぜられども依
初ゑ〻四年ゑのゑゑ持固めし一城攻さぐゑり容易打入てゑゑ
攻落ぢぐゑゑやと猶豫の氣色見えしゑば稲葉伊豫守ひざ
ゑゑひ四年このゑゑ持固めし城ゲいゑゑて攻落しかゑゑ八
五年六年と成し後八いゑそゑ打落しゆけゑべとさゑゑ八城の
落るためしハあるまじ抑軍乃道ゑ奇計と不用意
を討ゑ利ゐるゑの伐洲の股乃要害成就せし後一度も味
方ゑり責しことゑゑゑゑば防く手便ゑ油断ゑ抜ゑ
さる所ゑ大勢ゑゑく暴ゑ打入ゑばさぐゑし狼狽さぐ
らんその上大河ゑ多ゑゑく浪高し尾州ゑり急ゑ救ふ
ことも叶ふまし鹿あ伐山ゑ獵師ゲしる軍ゑ某ゑ任セ

ゑくと荒言していゑゑ夜討ゑ決定セしかば日根野兄弟も
地乃義ゑ同しゑゑ時稲葉ゲ差圖ゑゑく三人衆の勢三千餘騎
乃中ゑり八百餘騎を勝りて日根野ゲ陣ゑのこし置牧村半
之助ゲ手の勢千餘騎と日根野兄弟ゲ勢乃中ゑり八百餘
騎ゑぐゑり出し都合四千餘騎と二手ゑ分く先兵粮ゑ
ゑゑゼ丑の刻過る比洲股へ押寄ゑり左の先手八稲葉伊豫
守右の先手八氏家常陸介城ちゑくと寄ゑいゑや鉄炮
を打懸関を作り只一時ゑ責入ゑんと揉ゑりけり城中ゑ
ゑは竹中半兵衛三百餘騎ゑゑく防げども思ひ寄らざ
ることゑゑもてあゑし〻てゞ見えゑゑゑゑゑゑ稲葉
氏家乃手の者堀ゑ飛入塀ゑ取付無二無三ゑ乘入屋ゑ体

を見て牧村が勢こそ継ひく乗らんとはせども三人衆
乃兵士は文へられ但見物して居ありもり兎角して爰
内は稲葉氏家の先鋒なる城中よりみ入て旗わしして爰
を先途と走り廻る日根野兄弟も山中に陣所を居ぬ
待ち心元なく其爰に殘るべし彌次右衛門は州股に至
り三人衆をみ乃ぞよやがて五百餘騎にて走り来り
見まびきや城中へ乗入しとみえて所々に稲葉の旗を
立ら彌次右衛門軍に賀して悦び居る所に木下織
田殿と共に瑞龍寺の山乃麓にはりて洲股の体を伺ふ
時分ちらしと云不ぶとなれ山上にはりて合圖
乃狼烟を上るとひとしく爰にまた埋伏して置る尾州

勢八千餘騎は美濃侍乃降参せし者共六千餘騎その外洲
股近郷近在の地下人共都合其乃勢二万五六千餘騎八方よ
り起立齋藤方の兵士の分散して固めらる所々町口迄鉄
炮火箭をきえしく射かけ攻立るは思ひもよらざること
なれば防く手便失ひ一支え支得ず只落支度城乃こ
ろ所に八方乃山々峯々に手炬松を燃しけ其
勢幾千万といふことを知ず國中ちらこく尾州勢なる処
もはりうちまば一まづ本丸に引入く後のことよとはこく
はなく城に入んとまろる所を織田勢爰にこようち
出て攻まろるなれば夜いまだ曉ぐとろり人顔わかるして
誰とも知ず味方か敵と見贋ふく已が様々落失ら

日根野備中守もかの不意を驚きいそぎ出ばしと
所は三人衆乃のこせし八百余騎の兵共皆落失て今ハ纔
に馬廻り二三十人と過ざりけるバ山中を引取り惣搆
乃内ゆ入く防んと心ざし引処へ左の方より池田勝三郎
坂井右近三千余騎おゐて寄来り是を大事の敵と見
内ゆ右の方より森三左衛門前田孫四郎三千余騎より
押来るその跡ハ佐々内蔵助梁田出羽守福富平左衛門二
千余騎つゞく山下ゆゞく續くより其外當國乃侍中いゐ
しら尾州へ降りしとみえ日比見馴し拮捗なでしこ梅
鉢乃旗馬ざるしおび押立一勢〳〵凡一万三千余人猛火の
燃る勢をそやしそ責寄ば勿〳〵わりしを向べくもなく又

四方の山くゝまさし續くる旗乃數勝敷などいとゝ思ふ
る所ゆ大澤次郎左衛門我手乃者ゆ當國勢ゆ合セ五千余
騎洲乃股と稲葉山の間へ打て出て備を立ばバ三人衆も
牧村日根野彌次右衛門おのゞとゝ隔てらを救ふ手便
を失ひ織田殿も山上ゆ出しく水下ハ山下所〳〵の民
家ゆ放火して焼立る不ゞゆ日根野備中守もからくして
惣搆乃内へ引入ばゆゞ敵透間なくゝも来れバ防ぎ戦
ふん様もなくあさ北まゞふて但茫然ゝる所へ彼八百余
騎の兵ゝもと水下ゞ手乃五百余騎梶田稲田日比野なゝ
ゞもとして内ゆり切ゝゝる今迄味方ゆあゝしゝもの
共ゆをべ顔を見知ゝく追はゝく戦ふゆどゆふさしも乃

日根野備中守おくるゝかくてハ龍興乃ことも心えゝ
とく早く山上へ引入ゝられゝ木下と二人衆の兵士を
味方の内へ混ゝ置ばゝ思ひのまゝ内案内知を
故そしその内彼千三百人乃者共兵粮ハ籠置庫
の構へ至り奉行人ハ切殺しもゝ是を奪ゝ又洲股
此城をば三人衆の手へ責落ゝ加勢ハ向ひし牧村
ゝ手ハ引ゝ況や日根野彌次右衛門ゝ義勢ゝ
ゝ居ゝる所ハ稲葉山の烟を乃ゝゝ引返さんとゝる
ハ路次の敵兵支えけゝ勇力をゝ切抜く
主従わゝ十騎ゝハ打ゝ散ゝ乃体ゝ稲
葉山へ引上る是ゝ木下ゝ謀ゝ退く敵をハ追ゝ

其手乃大将をハ無事ゝ城中へ入ゝ下知をゝ
故ゝ引ハ彌次右衛門ゝ牛之助ゝ道ゝ度ゝ危
軍ゝ出合ひゝ隔ゝ漸二十騎ゝ引卒して
喘ゝ城乃中ゝ籠ゝ斯て後ハ稲葉伊豫守氏家
常陸介安藤伊賀守の三人ゝ静ハ洲股の城ゝ出て瑞龍
寺の寄手ハ加ゝ已ゝ一勢ゝ打立ゝ

重修真書太閤記二編巻之十四 終

重修真書太閤記二編巻之十五

織田勢稲葉山城攻難儀の事
并竹中半兵衛義心の事

永禄七年八月朔日織田殿美濃國ゑ出馬なりて木下藤吉郎ゞ智謀ゑらゐ暫時ゑ稲葉山乃城下ゑおゝ寄總搦ゑ乗取數万の大軍を以て稲麻竹葦の如く取かこゝ只一日乃内ゑ攻落ゑ候ゝと勇まれゝ所へ稲葉氏家伊賀守の三人洲の股ゑ竹中半兵衛ゑ守らせ各ゝ手勢ゑ引率ゝ織田殿の本陣へ衆向ゝ責口ゑ受取て一攻せむ候ゝと言上ゝ信長大きゝ悦びゝ

まづ三人城近く召呼ま此度洲乃股攻のさゝ〻ぎ抜群那わと賞美せられしゝかハ三人共一同ふ是全く君の高運ふとろく木下ゞ智謀其機ふ當まる故ふていと伍請ゆ一向責品の手配を望む信長即味方の諸士を分ゝく其前後城定めゝよ但嘉例ゆれバとゝく一番柴田權六郎勝家二番ふ稲葉氏家伊賀守三番池田勝三郎森三左衛門四番ふ坂井右近前田孫四郎五番ふ佐内藏助福富平左衛門六番ふ林藤八郎中条小八郎七番ふ名古屋彌五郎平手監物村井長門守林佐渡守八番ふ簗田右近九番ふ青山甚太郎十番ふ大澤次郎左衛門木下藤吉郎ちりかくのごとく十隊ふ組分同日巳刻ゆり稲葉山乃本城城責ゆりる此時城中ふハ大将右兵衛大夫龍興ゝく

ゆ〻〻ふとハ思ひもゝ〻〻ぬ先日三人衆の勸めゆりて城兵を爰彼所ふ分て防禦の備へと固く志はまゝ今ハいさゝか恐れ氣遣ふゝとゝゝと心緩〻〻近習者城集りゝく酒飲取乱〻たる所ふ今朝ゝゆ敵寄来りて山下城ゝゝゝ鉄炮の音夥しくきこゝえけるふ驚き恐まゝ出ゝゝも如何ゆるゝとゆ〻〻ふとゝゝされ果忙然〻る所え牧村日根野ゝゝ〻の休ふて走返り國中大〻敵とゝゝりゆ〻共此城堅固ふりく〻ハ容易く攻落さゝ〻ゝとも〻ゆまし其上爰ふ籠る兵士ハ忠義鉄石の如く一人當千の者ゆれバ必死城極めゝく防ぎ戦ゝふふ廿日三十日城過さゝとゝ安う城〻〻其内ふハ敗軍の味方も氣城取直〻て追〻走集るべ〻又江州の浅井備

前守長政主君と親しく紀州縁者なるをバよしも聞捨ゐいち
ぢはまー定めなく後援なるべー
浅井備前守長政を下野守久政の長男ゐて今年ハ廿歳
ろう長政の叔母近江御前と云ハ備前守亮政の末女久
政の妹齊藤龍興の室家乃由浅井記ゐみえたり
兎角日数経るゐどもなくば尾州勢も退屈して必定變城
生ぜべーと謀数定め諸勢も勇めて持口を固め鉄炮矢
石数十分ゐゐへく防ぐゐどゐ龍興聊勇氣なげま
ー日根野長井丸毛牧村ハ二丸ゐ出く防ぎゐ時ゐ織
田方の先鋒柴田權六一千余騎ゐく進めどもその跡くわ
三人衆の勢三千ばかりゐく引續その次ゐも段々ゐ備へ

く先陣利なくバ入替ら〻と雲霞乃如くゐ詰寄せろ城
中ハ石弓をとなもち箭数射ケけるとも透間なき
寄手なれども一矢ゐ二人ハ當る共仇矢も更ゐ射ろ
一番二番戦門ろ〻ー と見ゐるゑ三番四番の軍勢数入替
ようやゑ云ゐどこ日ハ西ゐ傾きけるゐよろ夜軍ゐ詮ゐ
るゑーとて心なくれども寄手麓の陣へ引返をば城
方ろう競ひろるゐ及ばず翌日早旦ろう短兵急ろ探
れども名ゐ負要害の地なるをバ寄手厳しく責
ども落べうもみえざその日もむなしく退きける織
田殿案ゐ相違乃城の様やと氣をいくちるゐ本陣を城の
麓まで引移ー自身わろ立下知ーゐをいえども三

日めゐも落し得めゐ城城中矢玉藥澤山ゐて弱る氣色
あけまゐ一夫險城守る時ハ万卒當り難しと云語今ゐ思
ひ知まゐう

道三義龍二代の間ゐ籠城の糧料十分ゐ貯ひと城思ふ比
織田殿此体城みるひ窮鼠かえ門く猫城噛といえり力攻り攻
ゐ人數のゐ損じて益ゐるべし此上ハ如何ゐる術城以く攻屋
ゐやと評定有けるゐ大澤木下進ゐ出某等城攻ゐ懸ら比ハ
一攻攻ヤべきゐれ共此三日の如く攻ハ勝利有べくも覺えハ
ゐ城無益のとゐ士卒城勞セ人ゐり暫く責口城閉げ能く勝
利の圖城計り其後攻入様ゐ仕らんと存ハさらんゐハ二両日攻
口城猶豫有べきゐとヤゐ信長も城攻功者の木下ゲヤ条故

あるべしと思ゐれゐハ即責口城引退く諸卒ゐ戦城罷て休息
を一先其後信長何とのおゐ比ハ竹中重治城召寄ゐ
ひ貴方ハ當國乃住人ゐく乃城ゐ久しく上下ゐ一ハ
城の案内知ゐらんいゐある方便城り門く責ハ此城落べきや
思ひ寄しことをいくバヤ屋しとありけるゐ重治承えり
某十七騎ゐく此城城奪ひしことをもいまだ左思召ハ形る屋
ゐ一ハ乃上ゐまゐハ一應龕忽の了見ヤ上ゲくれと答ヤけまゐ
織田殿よゐも不快の氣色ゐ重治ゲ詞いゐめも子細
いゐべしとおもゐまゐ熟ゲく思案ゐしゐゐ近き年の
とゐ城り重治ゐしく龍興城追出して大乃城を

奪ひしこともあり然もこゞの人數ふくのこと形り城
を奪ふくのちなゞらみ十七八人ふく籠ゝしをゞふ龍興
攻落し得ぢること是全く地の利乃ゝ信しきが故なゞ
し然らば只今龍興千余人ふく籠りしを斯の如く推
詰ゝく攻るふ落し得ざること實ふも其理明らゝなり但
攻撃乃謀あるべしとい定めく秘中の秘計なゞし是
を尋ねる方便ゝゝんと思惟せらまを再城攻のことを仰
られゞ先休息ゝるべしと陣中ふとゞめ置疎意なく饗
應しのひなり
流布本重治問答後人推量の説ふて取ふゝゝ信今或
人の記ふよりて改作ゝ又遁甲式ふよるふ稲葉山は

洲股乃良ふなゝう洲股ゝ稲葉山乃坤ふあゝる月上
元良ふ丙奇あり坤ふ壬将泊ゝ壬水丙火ふ克ゞゝ理
なしまれ重治が詞を隠ふて信長ふ熟思せしめ
所以なり
秀吉主従七騎間道へ赴く事
并堀尾茂助深山乃猛獣を狩事
稲葉山乃城堅固ふして籠城の兵士亦武勇絶倫なるふ
ゝ寄手損亡多くして三日を経るとゝくども落城
ふ及ばず竹中重治を召ゝく其謀を需らるゝ隠語
ふしてたしなゝゝ美濃ふ名を得し侍と云
奇謀妙策心中ふあしあるべきども多聞なゝかり容

易ふ語を設セざるものと思はれしらば木下ふ尋聞べし
と宣ひもあるふ木下亦詞城エふしてその意を探るこそ
さして其乃大概を悟り得しらば人の疑ひ有るべき
慮り重治ふ向ひ當城何ふど堅固なりとも國中只一
城乃とありその上兵粮玉薬多しと云とも城中ふ自然と
生ずる物ふなければ日數経るうちふものがらを盡
期もなるべし寄手かく大軍なれども只圍んで長陣ふ籠城
の士を疲らしなば城中を危急ふ迫り大将必死の期とある
べし元来當城を圍むこと龍興主の無道を戒め民の困
窮を救ふを以て本意とせ兼ねて貴邊と約束セし龍興
主の命請なくびふ齋藤苗字相續のこと今日ふ窮れり

さるにしかども三日の間攻め落さ此方より手を入れ人も言甲
斐なし何卒して三丸を攻取て詰の城乃一段ふなる人時愛ひ
を入人と存付てはくどもその道筋いさゝか不審の所は貴
邊を此ゝ〳〵乃ことと定めて委細ふ知り食ひ人仰ぎ
願ふくは其荒増を語りまくと尋ねしに重治も止と
を得ず長良の道を示しけり
流布本牧田の道と云然まども我なれを美濃人ふきく
ふ稲葉山の艮乃方長良川の流ふ一条の樵路乃ありしを
永禄中木下藤吉郎の襲ひし所と云
木下歓び急ぎ我陣所ふかくり浅野彌兵衛をまねき我
明日此城の一番乗を為せんと思ひ立ち依て當陣のことを小

市郎秀長ゐまろまるるものわ汝ら佐〻して補佐〻して諸士ゑ合
期せ〻むべ〻本意の如く城中ゐ入るばこの瓢箪ゑ竹ゐ
結付く印ゐ立て屋〻〻れを見次弟速ゐ責入ゆくと謀ゑ
中含て後本陣ゐ伺公〻〻大将ゐ荒増ゑ言上〻蜂須賀小
六同又十郎梶田隼人稲田大炊助青山小助日比野六大夫を
共ゐまりうゐ七人兵粮を腰ゐ着山中渇水の用意ゐ一瓢
乃飲ゑ背負く八月十三日の申乃刻より長良の道へ趣きな
り秀長と浅野と山役所を持固めくかの合圖の瓢箪ゑ
今やくとまち居〻り木下ちらの長良の川筋ゐそ〻
くたどる〻往ぎた〻して瑞龍寺の峯ば〻ら城の民
のうさゐ出べきもの〻人と思ふ路を尋出〻かども嶮岨言

語ゐ絶く登らんとまるゐ鳥乃翼ゐく下らんとおりくども鹿
乃蹄ち〻〻人〻目ゑ見合ていくぐ七人と云処ゐ神変不思議
の早業人ゐ勝ま〻〻木下ちれゑ枝ゐのぢり巌ゑ傳ひ釣縄を
さげく階子ゐ代兎角〻て一段平ちる所へ攀のぢりちゐ
兵粮乃うひ酒をのくまぐび休息ち〻るゐ折〻も十三日ゑ
と見ぐ月の光さやうゐ照てゆくも畫の如く笹乃隈く
明らうゐ見ちられゐ面白き氣色やと人〻興ゐ入ける
所ゐ右の方ちる谷間俄ゐさびしく聞え〻うぐいすやう
かる深山と云夜の中ちるものの人乃来るべきゐ
物ゐ驚き狐狼の卧処ゑ替るゐやと大ちる岩の有けゑ
小楯ゐとりく見くせば小牛ゐとるゑ猪手負たると

みえ木の根岩角の嫌ひなく猛り怒りて駈来る其跡より一箇の壮士大に叫ひて猪を呼かけ

木曾の山中に多く猪を猟とて聞ふ既に手負し後猪駈出し逃て狗追うけるきまれと闘ふ狗人に聲を懸ら

る時はその力大に陪せりとやや今茂助の聲を上しも

必狗ふ力を添しなを屈し

七人の衆いよく不審さられやらまかる山中に猪を追人乃

音きたるを尋常の猟師ふくあるはしいるを子細あらを

彼岩の上にのりて見れば彼男飛鳥の如く悪所をも云

ず飛越く走り来る猪い是に怒を増ていよく牙を鳴し

く彼男に飛かゝらんとまるを彼方此方と身を替し是を

遣違へ透を伺ひ猪の脊中ふひらりと乗を猪はたち弘落さん

と岩角樹木ふ身を摺付跳廻る蜂須賀又十郎若者なる上常

ふ山中を走り廻り廉狩を好しに猪を討留く彼若者を

助やと云し木下押留大事乃前の小事なり我ゝ与し

とあらばといふく動らさばおもやと見る内に彼壮士右の手

ふ山刀を抜持身を沈く猪のはらゝを突通し力

に任く穿しめの猛猪も急所の痛手ふ弱りける

あやうきと叫ぶく其まゝてに倒しを然ふ彼壮士も息

絶しあやうく同様に倒まく起もはゝ木下是を

見く彼壮士の挙動凡人とおもはざりゝ勇士を猛獣

と共に斃まし むるとを不便なりと岩上より下へ下く

見れば猪をば仕留はさとゝも左の手ゝ猪の尾先を握詰らし
惣身の力腕ゝ凝りしと見へく放さんとまれども放さぬ我略
あきれ果さて居ゝゝ漸ゝ氣緩ゝ腕直りゝ立上り七人
乃衆はゝく大ゝ驚きいとゝ物ゝとゝめてで見へゝ
此男は別人ゝ尾州岩倉の城主織田伊勢守信安ゝ仕し
堀尾忠右衛門ゝ子茂助と云しゝのゝ
流布本織田伊賀守信昌と書ゝ誤ゝ岩倉の織田と云は
津田權大夫親眞十五代津田三郎敏定文明三年越前ゝ
尾州ゝ移り丹羽郡岩倉の城ゝ住て丹羽春日井海士郡の
成敗を執行ゝ敏定の弟彈正左衛門信定は海士の東郡勝幡
乃城ゝ住す信定の嫡子信秀是信長の父ゝ敏定の長子大和

守敏信其子三郎左馬助信安後ゝ伊勢守と云四十五歳ゝて捐館し
後信長のゝ兄ゝ岩倉ゝ失ふ
岩倉の城落後は堀尾親子當國ゝ退き民間ゝ交り居るゝ父忠右
衛門は去ゝ年病死今は茂助一人と成血氣の盛成ゝ山野ゝ駈廻り
猪鹿猿兎杯を討止ゝ世を渡る斧と匕けゝ共尋常の獵師と同
待臥ゝ立とを嫌ひゝる山路ゝ分入て猛獸良禽を取て善價ゝ
くるゝ今宵ゝゝゝ茂木下ゝ目ゝ懸りしとゝふ一戦ゝ
甫庵本ゝ堀尾茂助吉晴の生所は尾州上郡供御所の人ゝて父
を中務少輔吉久と云國人三十六人の内ゝて上四郡の沙汰ゝ知人也
茂助童名は仁王丸と云り伯父を修理亮と云岩倉の軍十六歳
の時と云十七歳の時茂助と改しと云り又或説ゝは童名仁王丸

於小太郎と改め木下に仕えしが木下の従五位して筑前守を改めし時茂助と改めし共云始ハ木下中らに織田殿に仕後また木下に従共云或ハ織田殿の御狩のとき大なる猪と組で終りはたし殺けるを御覧じて名を尋玉ひしに堀尾茂助と答ましければ直に御家人に召加えられ足軽大将になされし共云何れも定かならぬことなりとぞ慶長十七年六月十七日卒九歳にて卒と云に因て推ば天文十三年甲辰の生にて十六歳ハ永禄二年己未すなはち岩倉落城の年なり然ば今年永禄七年甲子ハ廿一歳の時と知るべし

重修眞書太閤記二編巻之十五終

国立公文書館
National Archives of Japan